文化
文化・スポーツ
幸福量

日常のオアシス「音楽の力」に包まれて

日常に音楽があふれ、触れ合うことができるまち。
そこで暮らす浜松の人たちは、音楽に包まれる喜び、
演奏する喜びを常に感じている。
「音楽のまち」から「音楽の都」へ。
ヤマハ、カワイ、ローランドなど世界的楽器メーカーの本社を
有する浜松市は、長年「音楽のまちづくり」というコンセプトで
発展してきた一面を持つ。
その流れは今や、楽器作りだけにとどまらない。

「音楽の都」を目指す浜松市の特徴の一つは、音楽イベントの豊富さだ。〝世界的ピアニストへの登竜門〟と称される「浜松国際ピアノコンクール」や世界トップレベルの奏者を招いて若手演奏家を指導する「浜松国際管楽器アカデミー」「浜松国際ピアノアカデミー」など、世界の音楽家たちが注目するイベントを、浜松市では長年開催してきた。さらに、アマチュア奏者たちによる盛り上がりも大きく、「プロムナードコンサート」「ハママツ・ジャズ・ウィーク」「やらまいかミュー

第8回目となる世界の若手ピアニストの登竜門「浜松国際ピアノコンクール」は、今年の11月10日～24日に開催される。

Hamamatsu Happiness

ジックフェスティバルin浜松」といった市民が主体となって音楽を奏でるイベントは、年間を通じて300以上が開催されている。また、世界最高峰の音楽ホール「アクトシティ浜松」や日本初の公立楽器博物館であり世界最大級の楽器所蔵数を誇る「浜松市楽器博物館」といった恵まれた音楽施設が整っていることも特長だ。地域レベルから世界レベルに至るまで、浜松市はまさに音楽であふれているのだ。

中でも「音楽のまち」を感じさせる最たるものの一つは、27年続いているプロムナードコンサートだ。毎年4～10月の上旬（8月を除く）の週末、浜松駅前で開催されている定期コンサート。演奏するのは、小・中・高校の吹奏楽部や一般または企業の吹奏楽団で、浜松駅に降り立った瞬間、「ようこそ浜松へ」のおもてなしの心とともに壮大で爽快な楽団演奏に出迎えられる。

浜松市吹奏楽連盟の土屋史人さんはこう語る。「プロムナードコンサートの一番の特徴は、屋外で開催されるというところ。全国から浜松にいらっしゃった方、また浜松で生活している方に、「音楽のまち」を印象付けるとともに、『浜松はいつも良質な音楽に包まれている』『週末の浜松駅にいけば、レベルの高い吹奏楽のコンサートを聞くことができる』といった認識をしてもらえればと思っています」。

プロムナードコンサートのような市民参加型のイベントが成功する理由は、浜松市が〝アマチュア音楽のメッカ〟と言っていいほど、一般の方の音楽への意識が高く、各学校の吹奏楽部の演奏もレベルが高いところにある。「楽器製造のまち」として発展してきたことを背景に、子どもの頃から楽器や音楽に慣れ親しむ機会が多いのだ。例えば、多くの小学校には各教室に1台ずつオルガンが備わっているし、市内にはいたるところにヤマハやカワイなどの音楽教室がある。それに、年間を通してさまざまな話題性のあるイベントが開催される。音楽に携わっている人たちにとって、これほどまで〝音楽を発表する場〟〝音楽に親しめる場〟に恵まれている環境は至福と言えるだろう。こうした環境が整えられるのも、近隣住民の音楽への理解、参加者の賛同、行政や地元企業の積極的なバックアップといった「音楽のまち」としての確固たる土俵が浜松市にはあるからなのだ。

世界的規模のものから地域に密着したものまで、さまざまな趣向の音楽が、日常的に生活に溶け込んでいるまち・浜松。〝音楽の力〟は、触れる人の心を豊かにし、感性を磨き、人間関係を円滑にしてくれる効果を持つ。まるで空気を吸い込むように、季節を感じるように良質な音楽と混じ合うことができる幸せは、浜松市の財産と言える。日常のオアシスに包まれる「音楽のまち」は、今日も癒しのリズムとメロディを刻みながら発展していく。

全国でも有数の実力を誇る、浜松海の星高等学校吹奏楽部。上の写真は、オーストリア・ウィーンで演奏した時の様子。会場はウィーンフィルニューイヤーコンサートでも知られる学友協会・大ホール（黄金のホール）。指揮者を勤めた土屋さんは、生徒とともに夢のような感動を体験した。「さすが本場の音楽の都！という感じでした。言葉は悪いですが“たかが日本の高校生の演奏”なのに、会場は満席で、聴衆の誰もが音にしっかり耳を傾け、評価するという雰囲気がヒシヒシと伝わってきました。そして、演奏が終了した瞬間のスタンディングオベーション……もう涙が出てきましね。こういったすばらしい経験ができる生徒たちは本当に幸せだと思いますし、それも、音楽のまち・浜松の恵まれた環境で培った力だと感謝しています。浜松も、ウィーンのレベルまで“音楽の都”として成熟させていきたいですね。」

土屋 史人さん（つちや ふみひと）
浜松市吹奏楽連盟 副理事長／浜松海の星高等学校吹奏楽部 指揮者
（A級生涯学習音楽指導員）

幸せインタビュー

気が付いたら「音楽好き」に。これが浜松人の特徴なんだと思います。

幼い頃はピアノを習っていて、中学の吹奏楽部からオーボエを担当しています。浜松は「音楽のまち」と言われていますが、私自身は特に意識はしていませんでした。気が付いたら「音楽が好きになっていた」みたいな（笑）。これは浜松で生まれ育ってきた、浜松人ならではの特徴なのだと思います。いつもまちに音楽があって、身近に楽器があって、有名な演奏者のコンサートやコンクールが頻繁に開催されている。音楽に携わる人にとって、こんなに素敵で幸せな環境はないですよね。プロムナードコンサートでも何度か演奏することができ、吹奏楽を通じて、「音楽のまち」をアピールできるんだ！という喜びに満たされたのを覚えています。

市藤 さくらさん（いちふじ さくら）
浜松海の星高等学校2年　吹奏楽部所属

出産と育児にやさしい環境

出産は、人生における一大イベント。
少しでも安心できる環境で、信頼できる先生のもと、
自分の理想とする方法で出産したいと誰もが思っているだろう。
そんな希望をかなえてくれる恵まれた出産環境が、
浜松市には整っている。

基本的生活
出産・子育て
幸福量

「個人病院ならではのきめ細かな健診を受け、お産は充実した設備と先端医療技術が整っている総合病院でしたい。」「できるかぎり医療介入せずに自然分娩で出産したいけど、もしもの時には、すぐに高度医療の技術に頼れる安心感がほしい。」浜松市には、妊婦のこのような理想をかなえるシステムが整っている。

その一つとして挙げられるのが、浜松医療センター内にある『メディカルバースセンター めばえ』だ。ここは、助産師が女性の視点で継続的に妊産婦のケアを行い、安心して自然分娩に臨める施設で、妊婦が好きなアロマの香りと音楽に包まれながら、要望に応じたバースプランをもとにお産を行うことができる。また、BSケア[※1]などの母乳育児や退院指導まで、助産師ならではの細やかなアフターケアが受けられるのも特長だ。

『めばえ』では、出産＝医療の現場という雰囲気はまったく感じさせない。出産時に突然状況が変化した時の対応も万全だ。緊急帝王切開や輸血が必要になったり、新生児をすぐにNICU（新生児集中治療室）に運ばなければならない事態なども考慮して、周産期センターが隣接しているため速やかに対応できるのだ。

このような、完全オープンシステム[※2]とバースセンターを兼ね備えた病院は全国にも類がなく、理想的な出産診療方式として注目されている。施設や方法を自由に選択できる充実した環境、もしもの時の高度医療体制、この恵まれた出産環境が広く知られることで、浜松市での出産と育児に対する姿勢はもっと積極的になっていくだろう。それは「浜松の未来への宝」を守り、育てていくことに直結する。明るい浜松市の将来像がここに見ることができるだろう。

※1 BSケアとは、赤ちゃんの母乳吸啜メカニズムに基づいたケア。痛くないようにマッサージを行い、母乳が上手に出せるように導く。
※2 妊婦健診は診療所で行い、お産は病院で行うが、その際に診療所の医師が立ち会うシステム。

• 浜松医療センター
メディカルバースセンター めばえ
☎ 053-453-7111
http://www.hmedc.or.jp/about/barssenter.php

鈴木 久美子さん（すずき くみこ）
助産師

新しい命が生まれてくる感動の瞬間に携わっていることを心から幸せに思います。してあげているという感覚ではなく、させてもらっているという気持ちで常に仕事に臨んでいます。お母さんがまた、ここで産みたいと思ってくれるような施設でありたいですね。

鈴木 絵里さん（すずき えり）

幸せインタビュー

心地よい出産環境と頼れる助産師さんに感謝！

2012年1月15日、4人目のお子さんの紅眞智（こまち）ちゃんを出産。一番上の子どものときは、浜松ではなく里帰り出産をしましたが、2人目以降は上の子がいたので浜松で出産しました。2人目と3人目は浜松医療センターで出産しましたが、「バースセンターが良かった」と友だちから聞いたのがきっかけとなり、4人目は迷わずバースセンターで出産しました。いざ出産というときに部屋を移動せず、その場で出産できるのがうれしいですね。助産師さんもとても親切で、不眠になってしまったときも赤ちゃんを預かってくれたので、安心してゆっくりと休むことができました。病院という雰囲気もまったくなくて居心地もとても良かったですよ。

疑いのない、食材の宝庫

海の幸、山の幸、大地の恵。
ここまで疑いもなく「食材に恵まれた地域」だと言えるのは全国でも稀だろう。
プロの料理人や食通が手放しで賞賛する食材を、いつも身近で食せる贅沢。幸せの最上級がここにある。

基本的生活
食
幸福量

浜松の食べ物は?と言えば「うなぎ」が真っ先に思い浮かぶ。しかし、国内屈指の汽水湖である浜名湖では、海水と淡水が混ざり合い、アサリ、牡蠣、海苔、車海老、〝幻の蟹〟と呼ばれるどうまん蟹をはじめ約700種類以上の魚介類が、生息している。舞阪漁港ではシラス、天然トラフグ、鰹などの鮮魚が水揚げされている。「いない魚はない」は言い過ぎかも知れないが、ここまで多くの海の幸に出会えるのは浜松市ならではの特長だ。

山、大地に目を向ければ、三方原台地で生産されている馬鈴薯(じゃがいも)や日本一の生産量を誇るみかんをはじめ、セルリーやエシャレット、チンゲンサイ、たまねぎなどがあり、それらの生産量・質も全国に名立たるものだ。

さらには、食肉産業展で全国一位に輝いたこともある豚肉ブランド「浜名湖そだち」も。浜松市は、数えたらキリがないほど食材が豊富なのだ。

その中で、これからの季節(5月から7月)にぜひ味わってほしいのが、隠れた名物「もち鰹」。漁獲後4〜5時間以内(死後硬直が始まる前)で、氷で冷やしていない状態の鰹が「もち鰹」になると言われている。「もち鰹」は、遠方への出荷が難しく、浜松市でしか食せない逸品として食通から多大な評価をされているのだ。刺身でいただくと、その柔らかな歯ごたえと、もちもちっとした食感で「こんな鰹があったのか!?」というほど驚愕の味覚を堪能することができる。

「食材の宝庫・浜松」。この土地において、普段からなにげなく手に入る食材は、全国どこへ出しても恥ずかしくないものばかり。常に新鮮な、常に旬の、そして、常に最高峰の味に出会えることは、何ものにも代え難い「幸せ」へと通じている。

Hamamatsu Happiness

1

2

3

幸せインタビュー

浜松産の魚、野菜、肉は、徳川家康公が食したパワーフード!

秋元 健一さん(あきもと けんいち)
じねんグループ代表

現在、浜松市の食文化をさらに啓蒙していくため、「徳川家康公のパワーフード」をテーマに掲げた活動を行っています。浜松産の魚・野菜・肉は、種類も質も全国最高のレベル。保存食や加工食が少ないのも特徴です。つまり、浜松市の人たちは古くから、生の新鮮なものを季節に応じて食すことができる環境だったことを意味しています。こんな恵まれた環境は他ではなかなかありません。浜松市ならではの幸せですよね。

食に関するお問い合せは

1
もち鰹
悟乃坐 宿下吉庵
tel 053-459-2080
浜松市中区板屋町111-2
アクトタワー5F
11:00〜15:00 (L.O.14:00)
17:00〜23:00 (L.O.22:30)
※入荷状況をご確認ください。
http://www.jinen-g.jp/yadoshita/

2
地場野菜
ファーマーズマーケット
三方原店
tel 053-414-2770
浜松市北区根洗町1213-2
9:00〜18:00
http://www.ja-shizuoka.or.jp/topia/

3
浜名湖そだち
とんきい
tel 053-522-2969
浜松市北区細江町中川1190-1
10:00〜19:00
水曜(臨時休業あり)
http://www.tonkii.com/

地域を形成する浜松まつりの絆

失われつつある、日本の地域コミュニティー。
以前は「向こう三軒両隣」という言葉に代表されるように、住んでいる町内の人々が互いに助け合い、見守り合い、人間性を高めていこうとする基盤が存在した。
人口約82万人、7つの行政区を擁する浜松市も例外ではない。
しかし、変わりゆく時代の中で、独自の文化によって受け継がれてきた〝地域の絆〟を生み出すシステムが、今なお浜松市のそれぞれの地域には根付いている。
その一つが、市民参加型の「都市まつり」として知られる浜松まつりだ。
浜松人は、江戸時代から続くまつりの伝統を参加町ごとに受け継いでいくことで、日本の古き良き伝統、つまり、地域コミュニティーの確立と継承を今に守っているのだ。

江戸時代中期に広がった、長男が生まれた家に祝い凧を贈って揚げるという風習が、今なお「初凧」として残っている。現在の初凧には、その家の家紋と子どもの名前が入る。

まつりの夜を彩るのは、御殿屋台の引き回し。子どもたちが奏でるお囃子のリズム、ラッパ連の高鳴る音色、「オイショ、ヤイショ」のかけ声が入り乱れる。

幸せインタビュー

初凧は、結婚式や出産に匹敵する一大イベント

私は根っからの“まつり好き”。もちろん元浜組が大好きだし、「元浜が一番良い町！」と思っています。ずっとここで育ってきて、幼い頃から「近所の人たちはみんな家族」だと思っていました。今思えば、こういう感覚が身に付いたのは間違いなく浜松まつりのおかげですよね。主人は静岡市の出身なのですが、最初は「何で浜松の人間は、まつりでこんなにお金を使うの？」って不思議がってたんですよ。でも、子どもが生まれて、浜松まつりで初凧を揚げてもらった時に、主人がものすごく感動してくれたんですね。「自分の子どものために元浜町の人がこんなに一生懸命になってくれるなんて…」って。それからは私以上に“まつり好き”…というか“まつり馬鹿”になりました（笑）。自分から元浜組の青年部に入って、同世代の友だちもたくさんできたみたいで、すごく楽しそうです。もちろん私も初凧の時は感激しましたよ。「これは、結婚式や出産に匹敵するイベントだな」って冗談抜きで思いましたからね。

浜松まつり元浜組　高野 直子さん
（たかの なおこ）

「浜松まつりの準備は、※3日間のまつりが終わった次の日から始まる」という奇聞があるほど、〝まつり好き〟の浜松人は1年の362日をまつりの準備期間と考える。ここに、まつり＝地域コミュニティーの確立を実現させるポイントが見て取れる。初凧（その家に長男が生まれた時の祝い凧）の仕込み、子どもたちのラッパやお囃子の練習、組長をはじめとするまつり役員の決定など、各町に課せられる思案事項は多い。つまり、「わが町」のまつりを成功させるためには、住人が一丸となって、話し合いを重ね、助け合うことが絶対条件となっているのだ。そして、まつりを通して身に付ける暗黙のルールの中には、人としての振る舞い方、近所付き合いの仕方、年功序列や上下関係の意識などがしっかりと組み込まれている。まつりというクッションを挟みながら、日常的に地域の人たちと関わり合いが持てる環境があることは、まさに地域コミュニティー形成の潤滑油と言えるだろう。

浜松まつり・元浜組の元組長はこう語る。「浜松まつりは、浜松人の誇りであり、気概であり、浜松イズムとは何たるかの縮図です。各町がまつりに関わるすべての老若男女に、『自分の住んでいる町が一番！』と思えるような準備の仕方や、心意気を教えているのだと思います。毎年そういった環境の中で育っている浜松人は、大人も子どもも関係なく、町内を愛すること、家族を愛すること、隣近所を大切にすることといった道徳が当たり前のように身に付いていくのでしょうね。これはとてもすばらしい浜松の文化だと思いますし、住んでいる人たちも『この町に生まれて良かった』『一生この町で暮らしたい』と思ってもらえる要因になると思います」。

現在では170を超える町が参加する浜松まつり。それぞれの参加町ごとに、人としての振る舞い、地域の大切さを伝える文化があることは、近所とのつながりや助け合い、子どもの教育、老人介護、さらには防犯という観点から見ても生活の安心感につながっているはずだ。都市の巨大化によって失われつつあるものを、しっかりとつなぎ止めるため、浜松まつりなど地域に根付いたまつりを通して、形成してきた地域コミュニティーのカタチは、そこに住む人を心豊かに安心できるものへと導いてくれている。

※浜松まつりは、毎年5月3・4・5日の3日間開催

地域共同体の活力
地域コミュニティー
幸福量